日本英語教育史学会 会報
322
2024 年 8 月 26 日

HiSELT Society for Historical Studies of English Learning and Teaching in Japan
日本学術会議協力学術研究団体 日本英語教育史学会

発行人　日本英語教育史学会（代表：田邉祐司）

事務局　〒727-0023　広島県庄原市七塚町 5562
県立広島大学 庄原キャンパス 河村和也研究室
tel：0824-74-1727　fax：0824-74-0191
e-mail：membership@hiset.jp

会費納入口座（名義人：日本英語教育史学会）
ゆうちょ銀行【振替口座】00150-3-132873
ゆうちょ銀行〇一九店【当座口座】0132873

学会公式ウェブサイト www.hiset.jp

第298回研究例会報告

2024（令和 6）年 7 月 20 日（土），第 298 回研究例会が Zoom を用いたオンラインの形態により開催されました。参加者は 13 名でした。

例会では 2 本の発表が行われました。最初の研究発表では，熊谷允岐氏（茨城大学）が「大正時代の英単語集の研究：明治と昭和をつなぐ教材の変遷」というタイトルで発表されました。続く新企画「シリーズ：私の愛した教材」では，指定討論者に河村和也氏（県立広島大学）を迎え，馬本勉氏（県立広島大学）が「江川泰一郎ほか『A New Guide to English Grammar』（東京書籍, 1980）を中心とする高等学校英文法教材」というタイトルでお話されました。司会は前半を惟任泰裕氏（大阪成蹊大学），後半を河村氏が担当しました。以下に出席者の感想を掲載しますのでご参照ください。（①は熊谷氏，②は馬本氏及び河村氏の発表への感想です。）

◇　◇　◇

＜発表 1 の感想＞

◆①英単語集の発達を一貫したテーマとして取り上げられるなか，今回は大正時代における発達を綿密に調査・分析していただいてご発表になられ，今後のご発表を楽しみにするところです。英文法研究史のうえでは，舶来文法から斎藤の英文法を特徴とする明治時代に対し，大正時代は市河，細江，八木による科学的英文法の時代と言われますが，この点で英単語集の発達という点からは，大正期はいかなる点において「明治と昭和をつなぐ」と特徴づけられているのかが気になりました。すなわち，昭和時代，少なくともその戦前・戦中期の変遷が特徴づけられないと，「つなぐ」の語がどのような意味合いで用いられているか，ということで，今後のご発表を通して明らかにしていただければと願っております。

なお，英単語集に加えて英熟語集の発達も並行的にお進めいただくべきではないかと考えます。（Dragon）

◆①いつもながらの緻密な資料分析によって，大正時代の単語集の特徴に迫ろうとする熊谷先生のご発表をたいへん興味深くうかがいました。単語学習に「ミニマム」という考えが広がっていくのは，最小限の労力で最大限の効果をあげようとする背景があったのだろうと思います。ではそれぞれの単語集は，いったい「何の」最大の効果を「どう」最小の努力であげようとしたのか，興味は尽きません。Vocabulary Control Movement の先駆けとして，当時の日本の英語

教育界が歩んだ「ミニマム」への道を，ぜひ追い続けていきましょう（一緒に！）。（Horse）

◆①100 年，もしくはそれ以上前に出版された単語集は，手に入れるだけでも非常に苦労されていることと思います。その上で，集められた単語集を細かいところまで毎回調査されている熊谷先生のご努力に本当に頭が下がる思いです。今後のさらなる発見を楽しみにしております（匿名希望）

＜発表 2 の感想＞

◆②新シリーズのご発表第 1 弾として，興味深く伺いました。まるで，大学に進学の後はこれを基礎に江川の『英文法解説』を繙くのだよと言わんばかりの英文法カリキュラムに，附属高校英語科の先生方のなかにこの方針を主導された方がおられたのだろうか，それはどなただったのかを知りたくなりました。併せて，このカリキュラムの下に学ばれた発表者が，大学入学後に「解説」を読まれて，さらに他の文法書をも読まれるに及んで，高校生時のこの英文法学習をいかに遡及評価されているか，お伺いできればと思っております。筆者も，教育実習前に『英文法解説』を読み通しておき，教材研究・授業展開に臨みましたので，大学にて教員養成に関わるようになって何年かの間，学生に 4 年次実習前の春休みに「解説」を読んでおくようにと指導しておりました。中には，それで以て英文法指導なら任せておけと言える自信がついたと言ってくれる卒業生もいて，懐かしい思い出です。（Dragon）

◆②馬本先生がおっしゃっていたように，実際に自分たちが用いていた教材を調査・分析の対象にすることで，お話により現実味のある，ライブ感を受け取ることが出来ました。今回取り上げられた教材は決して新しいものではありませんが，時代を越えて，「良い教材は良い教材である」ということを強く感じました。（ポレポレ）

◆②新シリーズがどのようなものになっていくのか関心を寄せていましたが、単なる思い出語りにとどめず、客観的な分析が加えられていることに感心しました。馬本先生の教材への「愛」と、参加者のみなさんから寄せられる情報の数々とが融合するさまを見ながら、たいへん楽しい時間を過ごすことができました。（KZ）

発表を終えて

熊谷 允岐（茨城大学）

第 298 回研究例会では，大変お世話になりましたことを御礼申し上げます。本発表では大正時代の英単語集に注目し，その変遷を辿るとともに，明治期ならびに昭和初期との接続も報告しました。

日本の単語集は，大正時代に変革が生じました。明治期に見られたような「英語に親しむ」という雰囲気は単語集の編纂目的から消え，現代にも通じる「語彙の効率的な記憶」に特化したものとなりました。昭和以降の単語集にも通ずる語源やジョウンズ式発音記号の採用，語彙選定成果の反映も，大正時代にその基礎が形成されたことが確認できました。編纂者の多くが無名の庶民から学者や教員へと移った点が，当時の教材の質を向上させた要因の一つだと考えられますが，その使用対象者の多くも英語になじみのない庶民から，受験生に焦点が当たっていったことは注目されます。現代の単語集の雛型が，大正期の熾烈な受験競争の産物だとすれば，いわゆる「受験英語」の存在も，決して負の側面だけを示すものではないといえるのかもしれません。最後になりますが，ご参加の皆様方より有意義なご質問，ご意見をいただきましたこと，重ねて御礼申し上げます。本発表を下敷きとして，今後も研究に励ませていただきます。

発表を終えて

馬本 勉（県立広島大学）

自身の英語学習歴を彩る，愛着ある教材を紹介する「新シリーズ」の初回担当を終えました。本企画の関係者と当日の参加者の皆様に心よりお礼申し上げます。

授業での説明や学生の質問に答える際，私は江川の『英文法解説』を最大の拠り所としています。文法教科書，参考書，問題集のすべてが江川泰一郎氏によるものであった高校時代の学びがその原点だと思います。

発表では，教科書 *A New Guide to English Grammar* の整然とした例文配列，書き換えの繰り返しで理解を助けてくれた問題集『英文法問題の考え方』，そして「常識や文脈から判断すれば良い」という英文理解の「緩やかさ」を学んだ『英文法解説』について紹介しました。また，江川泰一郎氏に直接教えを受け，英文法教育史研究に邁進された故・伊藤裕道元副会長らの「出典研究」にも言及することができました。聴衆の皆様と様々な学習経験を共有し，江川文法の魅力を語り合う嬉しい時間は，あっという間に過ぎてしまいました。

ふだんは明治期の独習書のあれこれを語る機会が多いのですが，自ら学んだ書となると，発表の「ライブ感」がグッと増したように感じます。第２回でどのような教材の話に参加できるか，今から楽しみにしています。

会報 321 に関する誤字及び記載漏れに関するお詫び

会報 321 に関して，以下の誤字及び記載漏れがありました。ここに訂正とお詫びを申し上げる次第です。

(1) p.1「第 40 回全国大会報告」の 5 行目「述べ 108 名」→「延べ 108 名」

(2) p.15 伊村元道先生の英語教育史関係主要著作に『日本の英語教育 200 年』（大修館書店，2003）が抜けておりました。

伊村元道先生追悼記事①

伊村先生の思い出
—簡潔明瞭を以てす—

竹中 龍範

本学会第 2 代会長をお務めになられた伊村元道先生が本年 3 月，ご逝去になられました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

先生の思い出となるとさまざまな局面にわたって多くのことが浮かんできますが，ここには先生とやり取りした手紙にかかって，「簡潔明瞭を以てす」を信条とされた先生の一面をご紹介し，追悼に代えることといたします。

最初に思い出されるのは，わが日本英語教育史学会においては 2009 年 5 月 16・17 日に開催された全国大会が第 25 回大会にあたるというので，記念プログラムを企画することとし，「座談　私の英語教育史研究：次の世代に伝えたいこと」と題するシンポジウムを設定しましたが，その準備段階においていただいた 1 枚のお葉書です。この企画は，歴代の会長にご提言をお願いし，自らの英語教育史研究を振り返りつつ，これからの若い研究者に向けて研究の方向付けに資するような発

言をお願いするものでした。これは，当初，学界長老の先生方にご提言いただく方向で話が進められましたが，途中でこの計画が困難であるということになり，急遽，歴代会長の先生方にお願いすることと軌道修正がなされました—この間の経緯については『日本英語教育史研究』第 25 号（2010），pp. 157-161 の拙稿「開催にあたって」をご覧ください—。そして，その依頼文書を筆者のほうから発出し，経緯を説明して，ご登壇の諾否をお尋ねいたしました。その折に伊村先生からいただいたお葉書には裏面中央に「諾」の一言のみ，これほど簡潔明瞭な書簡はありません。V. Hugo が *Les Misérables* を出版後，旅行先から編集者に送った手紙に“？”とだけ記し，その意を察した編集者が返事に“！”とのみしたためたという逸話を念頭におかれたものかどうかお尋ねする機会を失しましたが，今となっては，筆者のほうも「謝」とのみ書いた御礼状を差し上げておくべきだったか，いやこれでは失礼かなと思ったりするところです。

もう一点，これは三宅鴻の随筆を読んでいた際にでくわした情報ですが，筆者はよく手紙などで自分のことに言及する場合に「小生」ということばを使っておりました。ところが，この随筆集に，小生などということばは目上に向かって用いるものではないと書いてあるではありませんか。あわてて国語辞典を数冊調べてみると，共通に見られる定義は「自らをへりくだっていう語」といったところで，目上に対しては用いないとの情報を与えるもののほうが少数でした。ただ，この情報を与えた辞書においても，では，代わりに何と言えばよいのかという情報が見当たらず，釈然としないままにおりました。そのうちに，伊村先生にお便りを差し上げることがあり，本文中には「小生」を避けて「私」とし，追伸中にこの一事を記して，このお便り中では「私」で通した旨を追記しておきました。数日後，お葉書をいただきましたが，そこには真ん中に「私も知りませんでした」の一言，これまた見事な簡潔明瞭でした。

普段のお話しにおいてもポイントをついた，簡潔明瞭なご発言が多かったように思いますが，あるいは，これらのことはだらだらとした文章を書きがちな筆者に対する頂門の一針だったかと思わなくもありません。

いまは在天にて古い英語教育史の図書を繙いておられようか，あるいは，お好きな Sherlock Holmes を味読しておられるかと推察しつつ，御霊安かれとお祈り申し上げるところです。

伊村元道先生追悼記事②

伊村元道先生を追憶する

河村 和也

伊村先生に初めてお目にかかったのは，語学教育研究所の研究グループの会合の際だった。中学校・高等学校の教員になって 3 年ほど経った頃だっただろうか。パーマーの著作を輪読する研究会のアドバイザーとして来られた先生が英学史・英語教育史を専門とされていることなど，つゆほども知らないわたしだった。

それから数年経ったある日，『英語教育』の増刊号をめくっていると「日本英語教育史学会」という文字が目に留まった。役員一覧には副会長として伊村先生のお名前がある。学会など縁遠いものと思っていたが，何かテーマを持って学びたいと思っていた時期でもあったので，先生にご相談申し上げ月例研究会に参加させてもらうことにした。

初めての例会の帰り道，「どうでしたか」と問われ「おもしろかったです」としか言えないわたしに，「おもしろいということは大切なことですよ」と先生はにっこり笑っておっしゃった。伊村

先生は，わたしをこの会に引き入れてくださった方だったのである。

あるとき，例会の席で外山正一のことを「まさかず」と言ったつもりで「しょういち」と呼んでいたことがある。懇親会に向かう道で二人きりになったとき，「歴史を扱う際に人の名前を間違えてはいけません」と先生は厳しく注意された。「あなたはまだ若いので言うんですよ。年を取ると誰も言ってくれなくなるんだよ」と付け足されたことばが胸にしみた。

またあるときには，不意にこんなことをおっしゃった。「君も，何かひとつきちんとしたものを書きなさい。軽妙とか洒脱っていうのは，そのあとに付いてくるものなんだから」と，ずいぶんと手厳しかった。わたしがどこかに記したものの書きぶりがお気に召さなかったのかも知れない。先生がおっしゃるようなきちんとしたものはなかなか書けずにいるが，そのことを思うにつけ，このときのことを思い出す。

学会では先生が会長の時代に本格的に役員の仕事をさせていただくことになり，個人的には 40 歳を目前に入学した大学院で先生に修士論文をご指導いただいた。お世話になったというひとことでは言い尽くせない思いのうちに，伊村先生のことばの数々を思い出している。

伊村元道先生追悼記事③

伊村先生を悼む

若有 保彦

伊村先生と初めてお話したのは 2001 年の夏だった。大学時代にお世話になり，本学会の会員でもあった若林俊輔先生の指導をもう一度受けたいという思いから，大学院修学休業制度を利用して宮城県の公立高校を休職し，拓殖大学大学院に進んだ私は，「英語教育学特論 III」という集中講義で伊村先生の授業を受けた。講義では先生の書かれた『パーマーと日本の英語教育』を読み進めた。本の内容に様々な補足をして下さったが，その裏話が実に面白かった。また先生の語り口は独特で，若林先生と比べてソフトなのだが同じくらい強く印象に残った（余談だが，先日『日本英語教育史研究 第 25 号』にあった「座談　私の英語教育史研究：次の世代に伝えたいこと」という，全国大会での座談会でのお話の記録を読んだが，先生の声が聞こえてくるような感覚を覚えて驚いた）。集中講義の最終日，先生から本の余白に「夏期集中講義の思い出に」というメッセージとサインをいただいた。その時は，若林先生の病気のことも全く知らず，翌年度から先生に修士論文の指導を担当いただくことになるとは夢にも思わなかった。

その後，2002 年 3 月に若林先生が亡くなられ，伊村先生は語研と拓殖大学での若林先生の仕事を引き継がれだ。恩師の死で「休職までして東京に出てきたのに・・・」と，若くに親を失ったような絶望感に沈んでいた私にとって，伊村先生が客員教授として修士論文の指導をして下さったことは本当に救いだった。先生の論文指導は，私が書いたものへの添削が中心だが，普段のソフトな語り口とは全く違って鋭さを感じた。実はこの時，英語教材作成の仕事にかかりきりで修論にあまりエネルギーを注げていなかったのだが，それを見透かされていた気がした。その後教材の仕事が一段落して本格的に修論に取り組むようになったが，手を広げて調べはするもののなかなか形にできない私に，「修士論文はこのぐらいまでの範囲にして，後は別のところで発表するといいよ」と気遣って下さった。

博士前期課程修了後，私は教員を退職してそのまま博士後期課程に進んだが，そこで先生から学部学生向けの英語科教育法の授業の手伝いをする機会をいただいた。時には授業を任せてもらえる

など，貴重な経験を積むことができた。

私が秋田大学に着任して以降は，先生は語研にも日本英語教育史学会にもあまり顔をお出しにならず，お会いしたのもほんの数回だった。先生にはいろいろお世話になっていたにもかかわらず何の恩返しもできなかった。亡くなられる前に，編集に関わった語研の創立百周年記念誌を届けられたことだけが慰めになっている。

島岡丘先生追悼記事

島岡先生の教えを胸に

上野 舞斗

島岡丘（たかし）先生のご逝去を悼み，謹んで哀悼の意を表します。先生との思い出をたどりながら，ここに改めて心からの感謝を申し上げます。

わたしが島岡先生に初めてお会いしたのは，第 246 回研究例会（2014 年 1 月 12 日，拓殖大学国際教育会館）でのことでした。当時は学部 2 年生。初めての上京で，学会の場にも不慣れだったわたしは，とても緊張していました。研究例会が終わり，ほっと一息ついたところで，「新入りさん？」という声に振り向くと，そこには温かい笑顔の島岡先生のお姿がありました。お話をしながら懇親会場に向かい，そのまま先生の隣に座らせていただきました。そこで，先生の夢が「日本人の英語発音に対する苦手意識をなくすこと」であること，そのために島岡式仮名表記（SKT）を開発されたことを伺いました。あっという間に 2 時間が過ぎていました。こうして，わたしは英語音声学の面白さ，いや SKT の魅力に惹き込まれていきました。

それ以降，学部時代の恩師である拝田清先生のお取り計らいで島岡先生の特別講義を受けたり，さまざまな学協会でお会いする機会に恵まれました。多い時はほぼ毎月お会いしていたように思います。「なぜ SKT では，この音連続がこのように表記されるのでしょうか」といった，いささか生意気な質問をぶつけることもありました。島岡先生は笑顔で懇切丁寧に応えられ，時には箸袋を黒板代わりにしてまでご教示くださいました。ある時，島岡先生はふとおっしゃられました。「SKT をより良いものにしていってほしい。 SKT が “Shimaoka Kana Transcription” というよりもむしろ，“Super Kana Transcription” だと言われて後世に残るように。」この言葉はわたしの研究上の道標の一つになっています。

その後，わたしは修士課程で英語仮名表記を歴史的に研究し，博士課程では英語仮名表記の教育的効果をテーマに研究を進めました。島岡先生との出会いがなければ，間違いなくこのテーマを選んでいなかったでしょう。修士論文や，雑誌に掲載された論文をお送りするたびに，丁寧なお手紙やびっしりとコメントを書き込んだコピーを送り返してくださいました。そのおかげもあり，博士論文も何とか今年の 3 月末に完成させることができました。ただ，その博士論文を先生のお手許に届けることができなかったことが，今も悔やまれます。

いつもエネルギッシュで，温かかった島岡先生。数えきれないほどの思い出が，鮮明に蘇ってきます。独特のイントネーションで「上野くん」と呼びかけてくださったお声が，今も耳に残っています。島岡先生との出会いという僥倖に恵まれなければ今のわたしはありません。先生，本当にありがとうございました。ご意思を受け継ぎ，精進を続けてまいります。どうぞ安らかにお眠りください。

『日本英語教育史研究』第 40 号 投稿論文の募集

2025 年 5 月に刊行予定の研究紀要『日本英語教育史研究』第 40 号への投稿論文を募集します。投稿締切は 9 月 30 日（月）23:59 JST です。投稿規程・標準書式に沿ってご投稿ください。

投稿先・問合せ先（紀要編集委員会）　kiyo@hiset.jp

〉〉事務局より

〉〉2024 年度第 1 回理事会を開催しました

7 月 30 日(火)18 時より 1 時間にわたり，オンラインで今年度第 1 回の理事会を開催し，以下の件を議論しました。

(1) 2025 年度全国大会について

来年度の全国大会は 5 月 17 日(土)・18 日(日)に首都圏で開催することとし，会場については複数の候補を挙げて検討を続けることとしました。9 月の理事会で決定することを目途とします。

(2) 11 月以降の研究例会の開催形態について

新型コロナウイルスの感染状況を見極めつつ，2025 年 3 月の研究例会を対面開催とする方向で調整することとしました。2025 年度の開催形態については引き続き検討します。

(3) その他

学会誌『日本英語教育史研究』の投稿募集について，その実務を確認しました。

〉〉事務局の「夏休み」について

事務局の業務は平日のみとしておりますが，8 月 26 日（月）より 9 月 12 日（木）までは遅い「夏休み」をいただき，電子メールへの対応のみとさせていただきます。この間に郵便・電話（留守番電話への吹き込み)・ファクシミリ等をお寄せくださった方へのお返事は 9 月 13 日（金）以降となりますが，どうぞご了承ください。

〉〉この先の研究例会・全国大会

- ◆ 第 300 回研究例会　2024 年 11 月 16 日（土）　オンライン
- ◆ 第 301 回研究例会　2025 年 1 月 18 日（土）　オンライン
- ◆ 第 302 回研究例会　2025 年 3 月 15 日（土）　対面開催（場所は検討中）

→日程や場所は変更される場合があります。その際は会報およびウェブサイトでお知らせします。

研究例会での発表希望者は，(1) 発表希望月，(2) タイトル，(3) 発表概要（100～200 字程度），(4) 使用予定機器，の 4 点を明記の上，発表希望月の 3 ヶ月前の 10 日（1 月発表希望であれば 10 月 10 日）までに日本英語教育史学会例会担当へお申し込みください。

Email: reikai@hiset.jp

日本英語教育史学会 第 299 回 研究例会

日　　時：　2024 年 9 月 21 日（土）14:00～17:00
　　オンライン開催

研究発表

学校英語教育は，なぜ危機に瀕しているのか？

久保野 雅史 氏（神奈川大学）

【発表者から】

難化した中学校教科書で，生徒・教員が悲鳴を上げています。小学校でも英語学習への意欲が二極化するなど，学校英語教育は破綻の危機に瀕しています。原因の一つは「外国語教育の抜本的強化のイメージ」で文部科学省が設定した目標が非現実的だからです。この「国策」が，英語力が順調に伸びているようなデータ偽装が全国的に常態化する現状も引き起こしています。このような危機的状況の元凶として，教育基本法の「教育振興基本計画」の問題点について検討していきます。

研究発表

母音直上方式の強勢表記の源流をたどる

上野 舞斗 氏（四天王寺大学）

【発表者から】

日本の辞書や教科書では，語強勢を表示するために，強音節に含まれる母音の直上に強勢符号を付与することが多い（例：applied /əpláid/）。この方法は日本独自の方法であるとされる。本発表では，この母音直上方式の強勢表記がどのように誕生したのか，なぜ誕生したのかについて，その源流をたどって検討する。

参 加 費：　無料
問 合 せ：　日本英語教育史学会例会担当（reikai@hiset.jp）

EDITOR'S BOX　実家へ帰省するために車で移動中，体長 1 メートル以上はありそうな熊が目の前を横切りました。一瞬の出来事でしたが，走っている熊の素早さは相当なものでした。／猛暑が続いておりますが，みなさまどうかご自愛下さいますよう。(若)

© 日本英語教育史学会会報編集部（秋田大学 若有研究室　wakaari@nifty.com）